

教職課程履修学生の教職意識調査

—本学部学科間比較を中心に—

広瀬 信・久保田 真功

A Study of Consciousness of the Students studying in the Course for the Teaching Profession

—A Comparison between Two Departments of Our Faculty—

Shin HIROSE, Makoto KUBOTA

E-mail : hirose@edu.u-toyama.ac.jp, makotok@edu.u-toyama.ac.jp

キーワード：教職意識，教員養成

keywords : consciousness regarding the teaching profession, teacher-training

I. はじめに

筆者は、以前、1996年入学の本学教育学部教員養成過程の学生を対象に進路意識調査、教員採用試験受験状況、卒業時の進路決定状況の追跡調査を行ったことがある¹⁾。当時は、教員採用数が減少し、せっかく教員になろうと入学した学生の約半数が教員への道を断念せざるを得ない状況があった。このような厳しい教員採用状況を1つの理由として、その後、富山大学では、教育学部を人間発達科学部に改組し、2006年度からその第1期生を受け入れた。

人間発達科学部は、教員養成学部ではなく一般学部であるが、教員養成機能を最大限残し、富山県の教員養成を中心的に担えるように努力した。発達教育学科と人間環境システム学科の2学科構成で、発達教育学科は、教育心理コース、学校教育コース、発達福祉コースの3コース、人間環境システム学科は、地域スポーツコース、環境社会デザインコース、人間情報コミュニケーションコースの3コースでそれぞれ構成されている。発達教育学科の学校教育コースは小学校教員免許取得コースで、発達福祉コースには特別支援学校教員免許取得サブ・コースと幼稚園教員免許取得サブ・コースが位置づけられている。人間環境システム学科の地域スポーツコースは中高の保健体育、環境社会デザインコースは中高の理科と家庭、ならびに中学校社会と高校地歴・公民、人間情報コミュニケーションコースは中高の英語と数学、ならびに高校の情報の課程認定をそれ

ぞれ受けている。

このように、発達教育学科は、幼稚園、小学校、特別支援学校教員の養成課程の機能を、人間環境システム学科は、国語、音楽、美術、技術を除いた中学校教員養成課程の機能をそれぞれ受け継いでいるが、人間環境システム学科の方は、どちらかという教育学部時代のゼロ免課程の性格を合わせ持っているので、教員免許取得希望者は半数強ではないかというのが当初の予想であった。しかし、実際にスタートしてみると、どちらの学科も9割前後が1年次の教職科目を履修する状況が続いている。そこで、人間発達科学部入学生の教職意識を調査し、その特徴を分析する必要があると考えて、3期生にあたる2008年度入学生の内、1年次前期開講の教職科目「教職と教育」履修者を対象にアンケート調査をすることにした。

教員養成課程の学生や教職科目履修学生を対象とする意識調査は、これまでいろいろな大学で、折に触れ実施されており、一般化できる問題も提示されている²⁾が、本稿では、差し当たり本学部二学科学生間の意識状況の違いのおおまかな分析に止め、その詳細な分析や先行研究の提起する諸々の問題との突き合わせは、別稿で改めて行うこととしたい。

II. 調査の対象と方法

(1) 調査対象

調査対象は、富山大学人間発達科学部に在籍する

1年生、179名中、「教職と教育」履修者153名で、履修率は、発達教育学科が86.2%、人間環境システム学科が84.8%である。

学科別、男女別の内訳は、表1の通りである。発達教育学科では9割近くを女性が占めているのに対し、人間環境システム学科では男女の割合はほぼ等しい。

表1 調査対象 (%)

	男性	女性	合計
発達教育	13.3	86.7	100.0 (75)
人間環境	46.2	53.8	100.0 (78)

※ () 内の数値は人数。以下、同様。

(2) 調査の実施

調査の実施時期は、2008年4月である。調査は授業の時間を利用し、集団一斉方式で実施した。調査用紙は調査終了後に回収した。

(3) 調査内容

調査では性別、出身地、所属学科などのほかに、以下のような事柄について尋ねた。

なお、⑥から⑨については、教員志望の者のみに回答してもらった。

- ① 学部・学科への進学理由³⁾
- ② 将来就きたい職業
- ③ 教員の仕事についてのイメージ
- ④ 教員についてのイメージ
- ⑤ 教育問題の解決への見通し
- ⑥ 教員になろうと思った時期
- ⑦ 教員志望に影響を及ぼしたと考えられる要因
- ⑧ 教員になりたいと思った理由⁴⁾
- ⑨ 地元での教員採用へのこだわり

III. 分析結果

(1) 出身地

表2は、学生の出身地を示したものである。いずれの学科も北陸地方出身者が多数を占めている。

表2 出身地 (%)

	北陸地方	その他の地方	合計
発達教育	86.7	13.3	100.0 (75)
人間環境	79.5	20.5	100.0 (78)

(2) 大学入試について

① 合格した入試タイプ

表3は、学生の合格した入試タイプを示したものである。いずれの学科も一般入試合格者が7割以上を占めている。

表3 合格した入試タイプ (%)

	発達教育	人間環境
推薦入試	27.0	19.2
前期入試	47.3	56.4
後期入試	23.0	24.4
社会人入試	2.7	0.0
合計	100.0 (74)	100.0 (78)

② 第1希望の大学

表4は、富山大学人間発達科学部を第1希望としていた者の割合を示したものである。いずれの学科も第1希望でなかった者が4割以上いる。

表4 本学部は第1希望であったか (%)

	第1希望	第1希望でない	合計
発達教育	56.0	44.0	100.0 (75)
人間環境	44.2	55.8	100.0 (77)

表5は、“富山大学人間発達科学部が第1希望でなかった”と回答した者に、第1希望としていた大学を尋ねた結果である。いずれの学科も「金沢大学」と回答した者が多いことがうかがえる。

表5 第1希望であった大学 (%)

	金沢大学	他の国公立大学	私立大学	合計
発達教育	43.3	56.7	0.0	100.0 (30)
人間環境	41.0	53.8	5.1	100.0 (39)

(3) 進学理由

① 全体的傾向(表6-1)

1年次の教職科目履修者の内、「教員(幼稚園教員も含む)になりたいから」は、発達教育学科で、80.8%であるのに対して、人間環境システム学科の場合は、64.9%とかなり低くなっているが、それでも一般学部としては非常に高く、「希望する教員免許状を取得できるから」が84.2%であることと合わせて考えると、人間環境システム学科についても、教員養成系と見なされていることがわかる。

表 6-1 富山大学人間発達科学部への進学理由（複数回答） (%)

	発達教育	人間環境
教員（幼稚園教員も含む）になりたいから。	80.8	64.9
希望する教員免許状を取得できるから。	87.7	84.2
保育士になりたいから。	37.0	9.3
希望する学科・コースの専門の勉強をしたいから。	93.2	78.9
地元の大学だから。	64.4	51.4
自分の希望と学力を考慮して、合格できそうだったか。	79.7	80.3
教育関係の仕事に興味があるから。	89.0	80.3
資格をもっていると結婚・就職に有利と思うから。	51.4	50.0
将来、子どもの教育に役立つと思うから。	47.9	51.3
親などがすすめるから。	20.5	30.3
高校の先生にすすめられたから。	32.9	43.4
友人や先輩にすすめられたから。	11.0	13.2

※「とてもあてはまる」と回答した者と「ややあてはまる」と回答した者とを合計した割合。

② 学科間の違い⁵⁾（表 6-2）

有意な差が見られたのは、「教員（幼稚園教員も含む）になりたいから」(p<0.01), 「保育士になりたいから」(p<0.001), 「地元の大学だから」(p<0.1), 「教育関係の仕事に興味があるから」(p<0.01), 「親などがすすめるから」(p<0.1) の 5 項目である。

「教員（幼稚園教員も含む）になりたいから」, 「保育士になりたいから」, 「地元の大学だから」, 「教育関係の仕事に興味があるから」という 4 項目については、発達教育学科で平均値が高い。一方、「親などがすすめるから」については、人間環境システム学科で平均値が高い。

表 6-2 富山大学人間発達科学部への進学理由

	所属学科	人数	平均値	標準偏差	
教員（幼稚園教員も含む）になりたいから。	発達教育	73	3.30	0.94	**
	人間環境	74	2.85	1.12	
希望する教員免許状を取得できるから。	発達教育	73	3.45	0.78	
	人間環境	76	3.34	0.90	
保育士になりたいから。	発達教育	73	2.16	1.18	***
	人間環境	75	1.40	0.70	
希望する学科・コースの専門の勉強をしたいから。	発達教育	74	3.53	0.71	
	人間環境	76	3.07	0.90	
地元の大学だから。	発達教育	73	2.81	1.29	+
	人間環境	74	2.45	1.28	
自分の希望と学力を考慮して、合格できそうだったか。	発達教育	74	3.09	0.78	
	人間環境	76	3.17	0.84	
教育関係の仕事に興味があるから。	発達教育	73	3.51	0.69	**
	人間環境	76	3.12	0.91	
資格をもっていると結婚・就職に有利と思うから。	発達教育	74	2.53	1.02	
	人間環境	76	2.45	0.97	
将来、子どもの教育に役立つと思うから。	発達教育	73	2.55	1.05	
	人間環境	76	2.49	1.08	
親などがすすめるから。	発達教育	73	1.74	0.88	+
	人間環境	76	2.01	0.96	
高校の先生にすすめられたから。	発達教育	73	2.07	0.96	
	人間環境	76	2.29	1.07	
友人や先輩にすすめられたから。	発達教育	73	1.49	0.73	
	人間環境	76	1.70	0.86	

※統計的検定の結果、+は10%水準で、*は5%水準で、**は1%水準で、***は0.1%水準でそれぞれ有意であることを示す。以下、同様。

(4) 将来就きたい仕事

① 全体的傾向 (表 7-1)

表 6-1 と同様、1 年次の教職科目履修者の内、発達教育学科の教員（幼稚園教員も含む）志望者は84.9%と高く、人間環境システム学科も76.6%と、一般学部としては非常に高く、明らかに教員養成系と見なされていることがわかる。教員以外では、対応するコースがある、保育士、福祉専門職、心理専門職、スポーツ関連職、語学関連職を選んでいる者が一定の割合を占めている。両学科とも、公務員を選んでいる者が多いことも特徴的である。

表 7-1 就きたい仕事（複数回答） (%)

	発達教育	人間環境
教員（幼稚園教員も含む）	84.9	76.6
保育士	51.4	14.9
心理専門職	31.9	14.9
福祉専門職	36.2	4.1
スポーツ関連職	11.6	44.0
語学関連職	5.8	24.7
研究職	14.7	9.5
公務員	69.6	76.0
企業	20.3	48.0
自由業	2.9	17.6
自営業	0.0	13.5

※「とてもあてはまる」と回答した者と「ややあてはまる」と回答した者とを合計した割合。

② 学科間の違い⁶⁾ (表 7-2)

有意な差が見られたのは、「教員（幼稚園教員も含む）」(p<0.05), 「保育士」(p<0.001), 「心理専門職」(p<0.05), 「福祉専門職」(p<0.001), 「スポーツ関連職」(p<0.001), 「語学関連職」(p<0.05), 「企業」(p<0.001), 「自由業」(p<0.001), 「自営業」(p<0.001) の 9 つである。

「教員（幼稚園教員も含む）」, 「保育士」, 「心理専門職」, 「福祉専門職」の 4 つについては、発達教育学科で平均値が高い。

一方、「スポーツ関連職」, 「語学関連職」, 「企業」, 「自由業」, 「自営業」の 5 つについては、人間環境システム学科で平均値が高い。

表 7-2 就きたい仕事

	所属学科	人数	平均値	標準偏差	
教員 (幼稚園教員も含む)	発達教育	73	3.41	0.85	*
	人間環境	77	3.08	1.06	
保育士	発達教育	70	2.43	1.16	***
	人間環境	74	1.53	0.81	
心理専門職	発達教育	69	2.01	1.10	*
	人間環境	74	1.61	0.74	
福祉専門職	発達教育	69	2.09	1.00	***
	人間環境	74	1.46	0.58	
スポーツ関連職	発達教育	69	1.39	0.73	***
	人間環境	75	2.29	1.22	
語学関連職	発達教育	69	1.45	0.61	*
	人間環境	73	1.81	1.02	
研究職	発達教育	68	1.53	0.89	
	人間環境	74	1.42	0.70	
公務員	発達教育	69	2.74	0.93	
	人間環境	75	2.95	1.04	
企業	発達教育	69	1.74	0.82	***
	人間環境	75	2.31	1.00	
自由業	発達教育	69	1.26	0.50	***
	人間環境	74	1.65	0.83	
自営業	発達教育	69	1.22	0.42	***
	人間環境	74	1.53	0.80	

(5) 教職に対するイメージ

① 全体的傾向 (表 8-1)

「身分が安定」「男女差別が少ない」「やりがいのある仕事」「子どもと関われる」などの肯定的イメージが、全体として、7~9 割程度と高く、マスコミ報道等を通じて流される「免許更新制」「多忙化」「労働時間の長さ」「いじめ、学級崩壊」「モンスターペアレント」などの問題状況に対する認知度も高い結果となっている。

② 学科間の違い⁷⁾ (表 8-2)

有意な差が見られたのは、「社会的意義が高い、やりがいのある仕事だ」(p<0.001), 「負担の多い割には、報われない仕事だ」(p<0.01), 「子どもと関われる楽しい仕事だ」(p<0.01), 「まわりから尊敬される、社会的評価の高い仕事だ」(p<0.01) の 4 項目である。

「社会的意義が高い、やりがいのある仕事だ」, 「子どもと関われる楽しい仕事だ」の 2 項目については、発達教育学科で平均値が高い。

一方、「負担の多い割には、報われない仕事だ」, 「まわりから尊敬される、社会的評価の高い仕事だ」の 2 項目については、人間環境システム学科で平均値が高い。

表 8-1 教職に対するイメージ

(%)

	発達教育	人間環境
他の仕事に比べ、収入が多い。	28.0	38.5
絶え間ない勉強（研修）の必要な仕事だ。	90.7	84.6
他の仕事に比べ、身分が安定している。	82.4	73.1
免許更新制が導入されるなど、身分が不安定になってきている。	68.0	57.7
他の仕事に比べ、休みが多い。	9.3	11.7
残業、持ち帰り仕事など、労働時間の長い仕事だ。	92.0	83.3
他の仕事に比べ、男女の差別が少ない仕事だ。	72.0	67.5
多忙化がさげられるように、非常に忙しい仕事だ。	96.0	83.1
自分の考えにそって自律的にやれる仕事だ。	49.3	34.6
国の教育方針にしばられ、仕事の自由度が低下している。	57.3	59.7
社会的意義が高い、やりがいのある仕事だ。	94.7	76.9
負担の多い割には、報われない仕事だ。	29.3	50.0
子どもと関われる楽しい仕事だ。	90.7	79.5
いじめ、学級崩壊など、子どもへの対応に追われるたいへんな仕事だ。	98.7	91.0
まわりから尊敬される、社会的評価の高い仕事だ。	34.7	50.0
モンスターペアレントなど、親への対応でストレスが多い仕事だ。	98.7	87.2

※「とてもあてはまる」と回答した者と「ややあてはまる」と回答した者とを合計した割合。

表 8-2 教職に対するイメージ

	所属学科	人数	平均値	標準偏差	
他の仕事に比べ、収入が多い。	発達教育	75	2.21	0.79	
	人間環境	78	2.35	0.79	
絶え間ない勉強（研修）の必要な仕事だ。	発達教育	75	3.33	0.68	
	人間環境	78	3.14	0.80	
他の仕事に比べ、身分が安定している。	発達教育	74	3.11	0.71	
	人間環境	78	2.99	0.80	
免許更新制が導入されるなど、身分が不安定になってきている。	発達教育	75	2.81	0.77	
	人間環境	78	2.62	0.83	
他の仕事に比べ、休みが多い。	発達教育	75	1.75	0.66	
	人間環境	77	1.65	0.72	
残業、持ち帰り仕事など、労働時間の長い仕事だ。	発達教育	75	3.35	0.63	
	人間環境	78	3.23	0.85	
他の仕事に比べ、男女の差別が少ない仕事だ。	発達教育	75	2.99	0.85	
	人間環境	77	2.84	0.89	
多忙化がさげられるように、非常に忙しい仕事だ。	発達教育	75	3.48	0.58	
	人間環境	77	3.34	0.88	
自分の考えにそって自律的にやれる仕事だ。	発達教育	75	2.51	0.74	
	人間環境	78	2.32	0.76	
国の教育方針にしばられ、仕事の自由度が低下している。	発達教育	75	2.69	0.72	
	人間環境	77	2.64	0.89	
社会的意義が高い、やりがいのある仕事だ。	発達教育	75	3.52	0.60	***
	人間環境	78	3.08	0.86	
負担の多い割には、報われない仕事だ。	発達教育	75	2.16	0.82	**
	人間環境	78	2.53	0.78	
子どもと関われる楽しい仕事だ。	発達教育	75	3.47	0.70	**
	人間環境	78	3.10	0.88	
いじめ、学級崩壊など、子どもへの対応に追われるたいへんな仕事だ。	発達教育	75	3.51	0.53	
	人間環境	78	3.38	0.76	
まわりから尊敬される、社会的評価の高い仕事だ。	発達教育	75	2.32	0.62	+
	人間環境	78	2.53	0.85	
モンスターペアレントなど、親への対応でストレスが多い仕事だ。	発達教育	75	3.52	0.53	
	人間環境	78	3.36	0.81	

(6) 教員に対するイメージ

① 全体的傾向 (表 9-1)

「熱意不足」「教え方が下手」「子どもの気持ちを理解していない」などの否定的なイメージがどちらの学科も比較的多い。

表 9-1 教員に対するイメージ (%)

	発達教育	人間環境
熱意が不足している教師が多い。	58.7	67.9
基礎学力の不足している教師が多い。	32.0	39.7
教え方の下手な教師が多い。	78.7	79.5
人格的に信頼できる教師が多い。	60.8	35.9
しっかりとした方針を持っている教師が多い。	42.7	37.2
子どもの気持ちを理解していない教師が多い。	60.0	79.2

※「とてもあてはまる」と回答した者と「ややあてはまる」と回答した者とを合計した割合。

② 学科間の違い⁸⁾ (表 9-2)

有意な差が見られたのは、「熱意が不足している教師が多い」(p<0.05), 「人格的に信頼できる教師が多い」(p<0.01), 「子どもの気持ちを理解していない教師が多い」(p<0.05) の 3 項目である。

「人格的に信頼できる教師が多い」については、発達教育学科で平均値が高い。

一方、「熱意が不足している教師が多い」, 「子

表 9-2 教員に対するイメージ

	所属学科	人数	平均値	標準偏差
熱意が不足している教師が多い。	発達教育	75	2.61	0.63
	人間環境	78	2.86	0.73
基礎学力の不足している教師が多い。	発達教育	75	2.33	0.60
	人間環境	78	2.46	0.80
教え方の下手な教師が多い。	発達教育	75	2.96	0.67
	人間環境	78	3.10	0.78
人格的に信頼できる教師が多い。	発達教育	74	2.66	0.71
	人間環境	78	2.33	0.77
しっかりとした方針を持っている教師が多い。	発達教育	75	2.43	0.55
	人間環境	78	2.38	0.65
子どもの気持ちを理解していない教師が多い。	発達教育	75	2.73	0.72
	人間環境	77	2.99	0.68

どもの気持ちを理解していない教師が多い」の 2 項目については、人間環境システム学科で平均値が高い。

(7) 教育問題の解決への見通し

① 全体的傾向 (表10-1)

発達教育学科で、63.0%が「体罰克服」の見通しは明るいと考えている他は、全体として、教育問題解決への見通しは否定的である。

表10-1 教育問題解決への見通し (%)

	発達教育	人間環境
学力不振児童・生徒の学力回復について。	38.7	30.8
校則問題の解決について。	37.3	26.9
教師の体罰の克服について。	63.0	41.0
いじめの解決について。	12.2	7.7
不登校の解決について。	14.9	11.5
校内暴力の解決について。	28.4	19.2

※「見通しは明るい」と回答した者と「どちらかといえば明るい」と回答した者とを合計した割合。

② 学科間の違い (表10-2)⁹⁾

有意な差が見られたのは、「教師の体罰の克服について」(p<0.05) の 1 項目であり、発達教育学科で平均値が高い。

表10-2 教育問題解決への見通し

	所属学科	人数	平均値	標準偏差
学力不振児童・生徒の学力回復について。	発達教育	75	2.37	0.56
	人間環境	78	2.26	0.67
校則問題の解決について。	発達教育	75	2.32	0.57
	人間環境	78	2.17	0.71
教師の体罰の克服について。	発達教育	73	2.66	0.67
	人間環境	78	2.33	0.89
いじめの解決について。	発達教育	74	1.73	0.71
	人間環境	78	1.72	0.72
不登校の解決について。	発達教育	74	1.84	0.70
	人間環境	78	1.79	0.78
校内暴力の解決について。	発達教育	74	2.18	0.65
	人間環境	78	2.00	0.70

(8) 教員になろうと思った時期

表11は、教員志望の者に教員になろうと思った時期を尋ねた結果である (p<0.1)。

いずれの学科も「高校生のとき」をあげる者が最も多いが、発達教育学科では「小学生のとき」をあ

げる者も多い。

表11 教員になろうと思った時期 (%)

	発達教育	人間環境
小学生のとき	23.3	14.0
中学生のとき	28.3	29.8
高校生のとき	38.3	54.4
その他	10.0	1.8
合計	100.0 (60)	100.0 (57)

(9) 教員志望に影響を及ぼした要因

① 全体的傾向 (表12-1)

学生たちは、「小・中・高の教員」, 「子どもと関わる活動」などを教員志望に影響を及ぼした要因と考えていることがうかがえる。

表12-1 教員志望への影響要因 (%)

	発達教育	人間環境
教師をしている親・親族	23.3	17.5
小学校時代の教員	60.7	41.1
中学校時代の教員	42.6	63.2
高等学校時代の教員	57.4	66.7
友人	21.3	22.8
教育の現状に対する不満	24.6	28.1
子どもとかかわる活動・体験	65.6	42.1
テレビ・ドキュメンタリー番組	18.0	22.8
テレビドラマ	9.8	12.5
映画	0.0	7.1
小説	4.9	5.3
教育関連の本	21.3	12.3
教育問題・事件の報道	19.7	31.6

※「とても影響している」と回答した者と「やや影響している」と回答した者とを合計した割合。

② 学科間の違い (表12-2)¹⁰⁾

有意な差が見られたのは、「小学校時代の教員」, ($p < 0.05$) 「中学校時代の教員」 ($p < 0.01$), 「子どもとかかわる活動・体験」 ($p < 0.01$), 「映画」 ($p < 0.1$) の4つである。

「小学校時代の教員」, 「子どもとかかわる活動・体験」については、発達教育学科で平均値が高い。一方、「中学校時代の教員」, 「映画」については、人間環境システム学科で平均値が高い。

表12-2 教員志望に影響を及ぼしたと考えられる要因

	所属学科	人数	平均値	標準偏差
教師をしている親・親族	発達教育	60	1.72	1.17
	人間環境	57	1.61	0.98
小学校時代の教員	発達教育	61	2.74	1.12
	人間環境	56	2.27	1.10
中学校時代の教員	発達教育	61	2.39	1.05
	人間環境	57	2.95	1.16
高等学校時代の教員	発達教育	61	2.72	1.05
	人間環境	57	2.95	1.09
友人	発達教育	61	1.84	0.92
	人間環境	57	1.82	0.98
教育の現状に対する不満	発達教育	61	1.92	0.88
	人間環境	57	1.95	0.95
子どもとかかわる活動・体験	発達教育	61	2.97	1.06
	人間環境	57	2.35	1.01
テレビ・ドキュメンタリー番組	発達教育	61	1.85	0.87
	人間環境	57	1.93	0.94
テレビドラマ	発達教育	61	1.62	0.71
	人間環境	56	1.79	0.85
映画	発達教育	61	1.38	0.49
	人間環境	56	1.59	0.73
小説	発達教育	61	1.44	0.59
	人間環境	57	1.51	0.60
教育関連の本	発達教育	61	1.85	0.87
	人間環境	57	1.72	0.77
教育問題・事件の報道	発達教育	61	1.92	0.86
	人間環境	57	2.05	0.97

(10) 教員になろうと思った理由

① 全体的傾向 (表13-1)

「やりがいのある仕事」が共通してトップで、「家庭生活と両立できる」を除けば、何れも半数を超えている。

表13-1 教員になりたいと思った理由 (%)

	発達教育	人間環境
教えることが好きだから。	63.9	58.9
子どもと生活するのが好きだから。	82.0	60.7
やりがいのある仕事だから。	91.8	80.4
すぐれた教師の感化を受けたから。	63.9	73.2
社会的・経済的に安定しているから。	52.5	54.5
家庭生活と両立できるから。	29.5	26.8

※「とてもあてはまる」と回答した者と「ややあてはまる」と回答した割合。

② 学科間の違い (表13-2)¹¹⁾

有意な差が見られたのは、「子どもと生活するのが好きだから」 ($p < 0.01$), 「やりがいのある

仕事だから」(p<0.05)の2項目である。いずれも発達教育学科で平均値が高い。

表13-2 教員になりたいと思った理由

	所属学科	人数	平均値	標準偏差	
教えることが好きだから。	発達教育	61	2.85	0.79	
	人間環境	56	2.79	0.80	
子どもと生活するのが好きだから。	発達教育	61	3.26	0.83	**
	人間環境	56	2.82	0.81	
やりがいのある仕事だから。	発達教育	61	3.46	0.70	*
	人間環境	56	3.13	0.76	
すぐれた教師の感化を受けたから。	発達教育	61	3.03	0.98	
	人間環境	56	3.02	0.88	
社会的・経済的に安定しているから。	発達教育	61	2.48	0.74	
	人間環境	55	2.71	0.79	
家庭生活と両立できるから。	発達教育	61	2.15	0.75	
	人間環境	56	2.23	0.79	

(11) すぐれた教員に出会った時期

表14は、「教員になりたいと思った理由」について「すぐれた教師の感化を受けたから」と回答した者に、その時期を尋ねた結果である。

有意な差が見られたのは「小学生のとき」(p<0.01)と「中学生のとき」(p<0.01)の2つである。

発達教育学科では「小学生のとき」をあげる者が多い一方で、人間環境システム学科では「中学生のとき」をあげる者が多い。

表14 すぐれた教員に出会った時期 (%)

	所属学科	あてはまる	合計	
小学生のとき	発達教育	66.7	100.0 (39)	**
	人間環境	32.6	100.0 (43)	
中学生のとき	発達教育	38.5	100.0 (39)	**
	人間環境	69.8	100.0 (43)	
高校生のとき	発達教育	56.4	100.0 (39)	
	人間環境	55.8	100.0 (43)	

※ 複数回答。

(12) 地元での教員採用へのこだわり

表15は、教員志望の者に地元での教員採用への

表15 地元での教員採用へのこだわり (%)

	発達教育	人間環境	
地元で教員になれなければ、地元に残れる他の職をさがす。	18.0	36.4	***
地元で教員になれなければ、地元で非常勤講師として教員の仕事をとする。	54.1	18.2	
地元で教員になれなければ、地元採用にこだわらず、大都市圏での採用に挑戦する。	27.9	45.5	
合計	100.0(61)	100.0(55)	

こだわりについて尋ねた結果である (p<0.01)。

発達教育学科では、地元で教員になることを望む者が多い。

一方、人間環境システム学科では、“教員になれるのであれば地元以外でもかまわない”とする者が多い。

IV. まとめと考察

本研究では、本学部1年次の教職科目履修者を対象とした質問紙調査をもとに、教職に対する意識などについて分析を行った。

以下、発達教育学科の学生と人間環境システム学科の学生との間で見られた特徴的な違いについて述べるとともに、若干の考察を試みたい。

(1) 第1希望の大学・学部・学科について

大学受験の際、本学部を第1希望としていた者は、発達教育学科では56.0%、人間環境システム学科では44.2%であった(表4)。

一方、本学部を第1希望としていなかった者の多くは、金沢大学を第1希望としていた(表5)。発達教育学科では、金沢大学人間社会学域学校教育学類を希望していた者が比較的多く見られた。人間環境システム学科では、金沢大学人間社会学域地域創造学類を希望していた者が比較的多く見られた¹²⁾。

この結果より、学生を獲得するにあたって本学部と競合するのは金沢大学人間社会学域であると言って間違いのないであろう。問題は、本学部の学生たちが金沢大学人間社会学域のどういった点に魅力を感じていたのか、ということである。この点について明らかにしていくとともに、それを踏まえた学部・学科づくりを行っていく必要がある。

(2) 本学部・学科への進学理由について

本学部・学科への進学理由について分析したところ、発達教育学科では「教員や保育士になりたいから」や「教育関係の仕事に興味があるから」をあげる者が多かった。その一方で、人間環境システム学科では「親などがすすめるから」をあげる者が多かった(表6)。

発達教育学科は教員養成を主たる目的としているが、人間環境システム学科はその役割を教員養成に限定していない。この点からすれば、発達教育学科

の学生で“教育関係の仕事に就きたいから”という理由をあげる者が多いことは、決して不思議なことではない。

しかし留意すべきは、人間環境システム学科で「親などがすすめるから」という、いわば消極的にも解釈することのできる理由をあげる者が多いことである。これらの学生に明確な目的意識をもたせることにより、学習に対するモチベーションを高め、それを維持させていくよう努めることは、本学部に課せられた重要な課題であると言えよう。

(3) 進路意識について

当然のことであるが、両学科のコースに対応する保育士、福祉専門職、心理専門職、スポーツ関連職、語学関連職を選んでいる者が一定の割合を占めている。しかし、両学科とも、教員（幼稚園を含む）を志望する者が一番多い（表7）ことは、改組後の本学部を、旧教育学部と同様の教員養成系学部と認識していることを示し、少なくとも1年次においては、教職科目の履修目的が、単に教員免許資格だけを取得しようとしている訳ではないことを示している。この意識を持続させ、さらに育て、教員採用試験の受験と合格にどこまでつなげていけるかが課題である。

(4) 教職に関する意識について

教職に対するイメージについて分析したところ、発達教育学科では「社会的意義の高い、やりがいのある仕事だ」や「子どもと関われる楽しい仕事だ」と考えている者が多かった。一方、人間環境システム学科では「負担の割には、報われない仕事だ」と考えている者が多かった（表8）。

この結果から、発達教育学科の学生は人間環境システム学科の学生と比べ、教職を魅力的な職業としてとらえていることがうかがえる。

また、教員に対するイメージについて分析したところ、発達教育学科の学生は「人格的に信頼できる教師が多い」と回答している者が多い一方で、人間環境システム学科の学生は「熱意が不足している教師が多い」や「子どもの気持ちを理解していない教師が多い」と回答している者が多かった（表9）。

この結果から、発達教育学科の学生は教員に対して好ましいイメージをもっている一方で、人間環境システム学科の学生は教員に対して否定的なイメー

ジをもっていることがうかがえる。

さらに、教員志望に影響を及ぼしたと考えられる要因について分析したところ、発達教育学科では「子どもとかかわる活動・体験」をあげる者が多かった（表12）。具体的な活動について自由記述で回答を求めたところ、「14歳の挑戦」をあげる者が比較的多くみられた。これは富山県でキャリア教育の一環として行われている中学2年生を対象とした活動であり、学校外で職場体験活動や福祉・ボランティア活動に参加させるというものである¹³⁾。このような活動が、当時中学2年生であった本学学生のキャリア意識の形成に少なからず影響を及ぼしていた、ということは非常に興味深い。

(5) 地元での教員採用へのこだわりについて

地元での教員採用へのこだわりについて分析したところ、発達教育学科では、地元で教員になることを望む者が多かった。一方、人間環境システム学科では、“教員になれるのであれば地元以外でもかまわない”とする者が多かった¹⁴⁾。

教員採用の状況は、一時に比べるとかなり改善されてきている¹⁵⁾。しかし、富山県における教員採用者数は大都市圏と比べた場合、はるかに少ない。今後は、地元で教員になることにこだわる学生に対し、他県の教員採用試験も受験するように働きかけていく必要があるかもしれない。

註

- 1) 広瀬（1999・2000）。
- 2) 古くは、教師の職業的社会化過程について理論的な問題提起をした、今津（1978・1979）がある。
- また、教員採用数減少時代の、教員養成学部学生の中での脱教職志向学生の増加問題に焦点を当てたものとして、明石ほか（1994）や、加野・浦田（1997）などがある。
- その他の多くは、新井・樋口（1993）に代表されるように、自分の大学の教職教育改善の基礎資料にするための調査が多い。
- 3) 曾我ほか（1982）を参照するとともに、独自の項目を加えた。
- 4) 本橋（1985）を参照した。
- 5) 各項目について「とてもあてはまる」から「まっ

たくあてはまらない」の4段階で回答してもらい、それぞれについて4から1の得点を配分している。

なお、進学理由に関する項目については統計的検定を行っている。

検定を行った主たる理由は、次の2つである。1つは、検定の結果を2つの学科間の違いを示す指標として参考にしたかったためである。

もう1つの理由は、本研究では富山大学人間発達科学部の学生を母集団としているのではなく、地方の旧国立大学旧教員養成学部の学生を母集団としているためである。

本研究の結果は、富山大学人間発達科学部と同様に、“教員養成課程”と“教員養成を主目的としない課程”とを併設している旧教育学部に何らかの示唆を与えることができると考えられる。

6) 各項目について「とてもあてはまる」から「まったくあてはまらない」の4段階で回答してもらい、それぞれについて4から1の得点を配分している。

なお、統計的検定を行っている理由については、註(5)の通りである。

7) 註(6)と同様。

8) 註(6)と同様。

9) 各項目について「見通しは明るい」から「見通しは暗い」の4段階で回答してもらい、それぞれについて4から1の得点を配分している。

なお、統計的検定を行っている理由については、註(5)の通りである。

10) 各項目について「とても影響している」から「まったく影響していない」の4段階で回答してもらい、それぞれについて4から1の得点を配分している。

なお、統計的検定を行っている理由については、註(5)の通りである。

11) 註(6)と同様。

12) 本学部を第1希望としていなかったと回答した学生については、第1希望としていた大学・学部・学科名について記述してもらった。

13) 同種の試みは、他県でも行われている。例えば、兵庫県の「トライやるウイーク」など。

14) 発達教育学科で地元志向の学生が多いことは、表6の「富山大学人間科学部への進学理由」からもうかがえる。

15) 山崎(1998)は、各都道府県の教員採用者数の今後について、推計値を算出している。

引用・参考文献

明石要一・高野良子・川島よしえ 1994,「教職意識の分極化に関する一考察」『千葉大学教育学部研究紀要 第一部』第42巻, 97-108頁。

新井孝喜・樋口直宏 1993,「学生の教職観と教師教育への期待——筑波大学学生へのアンケート調査から——」『日本教師教育学会年報』第2号, 67-83頁。

今津孝次郎 1978,「学生の内的側面からみた教師養成課程——本学部学生意識調査報告——」『三重大学教育学部研究紀要』第29巻第4号, 17-33頁。

今津孝次郎 1979,「教師の職業的社会的化(1)」『三重大学教育学部研究紀要』第30巻第4号, 17-24頁。

加野芳正・浦田広朗 1997,「チャイルドショックと教員養成学部——脱教職志向学生の増加とその要因——」『日本教師教育学会年報』第6号, 77-94頁。

曾我雅比兒ほか 1982,「教職課程履修学生の意識と実態に関する比較考察——本学学生の調査事例の報告を中心に——」『岡山理科大学紀要(B 人文・社会科学)』18巻, 31-51頁。

広瀬信 1999,「教員養成課程学生の進路意識調査(1)」『富山大学教育実践研究指導センター紀要』第16号, 11-21頁。

広瀬信 2000,「教員養成課程学生の進路意識調査(2)」『富山大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』第1号, 57-66頁。

本橋富美子 1985,「教職課程履修に関する意識調査」『大阪城南女子短期大学研究紀要』19/20巻, 175-191頁。

山崎博敏 1998,『教員採用の過去と未来』玉川大学出版部。

(2008年10月20日受付)

(2009年1月21日受理)